

---

**あれ.....ここはどこですか？**

Sonnet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あれ……ここはどこですか？

### 【Nコード】

N8678Y

### 【作者名】

S o n n e t

### 【あらすじ】

気が付くとそこは病室の片隅。何時の間にやら俺はネギになっていた！しかもここはただの『ネギま』の世界ではなかったようです……ネギの珍道中、始まるよ！

## 第1話 輪廻転生……？

「……ん？ここは、病院……？」

ついさっきまで俺は何か別なことをしていたはずじゃ……嗚呼、頭の中に靄みたいな、霞がかっているような感覚がしてまともに考える事ができない。いや、それでも記憶が断片的にだが浮かび上がってきた。そう、たしか俺はあの時

「ネギ!!」

「うわっ!!」

やつとのことかと思いだ仕掛けた俺のメモリアルは、ドアを蹴破るかのように入ってきた謎の人物Aによって欠き消されてしまった。それに俺の名前はそんな焼き鳥屋に出てくるような名前じゃ有りませんよ。

2

……おや？この人、どこかで見たことあるような……いや、たしか俺の事をネギと呼んだか？ハッ!?まさか、MA・SA・KA!?

「ネカネ、さん？」

「どうしたの?どこか痛いのか？」

現状、納得できないが理解した。ここは『魔法先生ネギま!』の世界だ。

どうして俺が漫画の主人公という立場に立たされているんだとか、前の俺はどうなってしまったんだとかを誰かに問いただいたいのが正直な気持ちなんだが……そんな事を気軽に聞けるような相手が近

くにいない。いるわけもないって。病室の一角で「俺はネギじゃない」なんて叫んだ所で魔法を使って「痛い痛い痛い飛んでいけ」だ。最悪、記憶を失わされてしまうなんて事になれば、笑い話にもならない。

「仕方無い……か」

「ネギ？」

「え？いや、何でもないよ！ナンデモ！」

「そ、そう？」

ぬう……俺は　　と言う名前だったが今はネギ、ネギ・スプリングフィールドなんだ。初級魔法やら周囲の簡単な人物関係ぐらいならまだしも、小さな子供がらしくない言動をするのはまずいのか？

嗚呼、ネカネさんが心配しているのが幻聴で聞こえてきそうな視線を送ってくるのはやめてください。自分が腐ったミカンみたいな存在だつてのは理解してますから。……それより、今はどんな状況なんだ？

「あ……」

駄目だツ……1ミリたりとも前の記憶ネギが浮かんでこねえ！肺から空気を絞り出すのと同時に発声してみたが、それは自身にとっては無意味どころかマイナスになってしまった。

「ねえネギ、本当に大丈夫？お医者さん呼べば良い？」

「本当に大丈夫だから心配しないで！ね、お姉ちゃん」

嗚呼……この年になってから『ね』なんて言うことになるとは。

取り敢えず！病院にいることからあの忌まわしき悪魔襲撃事件が過ぎ去ってしまったと考えるおこづ。いや、過ぎていることをガチで祈る。ほとんどの村人が石になるとはいえ、そうそう人の死に目には遇いたくはないし、ネギの能力をフル活用しても所詮は子供……ハイスベックできることは限られているしな。

そんなネギの周囲にいた人の中でも比較的ネギがなついていたのは、たしか……

「ねえ、ネカネお姉ちゃん」

「どうしたの？」

「スタンおじさんは？」

「え……ああ！スタンさんなら元気にしてるわ！もちろん、他の皆もね」

「そう、なんだ……」

ネカネさんの視線が不規則に宙を泳ぐ。表情も無理に作っている感じがする笑顔だ。……良かったー！！凄い不謹慎な発言だったのは理解しているが、それでも叫ばずにはいられない。これから先に悪魔襲撃が無くなってえがったよー！！無論、心の中で叫んでるよ？

でも、これからどうしようかねえ……確か、また悪魔襲撃が起こることの無いようにメルディアナ魔法学校の校長がネギに入学を進めるんだっけ。ネギじゃなくナギの息子だと思われる予感がピンピンなんだが。ううわあ……この歳にして周囲との確執を体感せにやならんとは……鬱だ。

だが、それでも！念願の魔法が使えるんだから嬉しいことこの上ない！現実じゃある不名誉な条件を満たして30歳を迎えることで

魔法使いになると言われていたが……フフ、今となっちゃんあ良い記憶だぜ。

「ねえネギ」

「何？」

「メルディアナの学校の校長からんだけど、魔法学校に入学するつもりはないかって」

来たあ！有り余る才能を開花させるためのプロセス。さっすがネカネさん、空気が読めるねえ……胃に穴が空くかもしれないプロセスでもあるが、気にするもんか！穴が空いても魔法で治せば良いんだよ。そんな魔法が……無けりゃ創る！

「魔法学校に？僕、ネカネお姉ちゃんと一緒にメルディアナに行きたいな」

ふう……3〜4歳くらいの子供だったらこんな感じで反応するかな。

「ぶふうっ」

「あれ……お姉ちゃん？ねえ、お姉ちゃん？」

ネカネさんがいきなり前のめりに倒れました。俺には何が起きたのかさっぱりで、何が起きたのか理解できません。除きこんだらネカネさんの表情が紅くなって、何かに悶絶しているように見えたのも間違いじゃないかな？……唯一の頼れるお方がシヨタコンだとは考えたくはないでござる！

「心配させてごめんなさいね。もう大丈夫だから」

心配なのは貴女の性癖ですよ。

あの後、いくら呼び掛けても反応を示さないネカネさんに業を煮やした俺が手元にあつたナースコールに手を伸ばし、躊躇うこと無く押してやったのだ。当然、何か起きたのかと駆けつけてくるナース達……若い人はあまりいなかったようだが、ベッドの脇で倒れ付いたネカネさんを見て慌てて連れ出していった。

……元氣そうでナニヨリですが、どうせだったらシヨタ疑惑もぬぐいさつて、るよな？子供には見せられない教育現場の実態！みたいなことになってねえよな！…俺は何を言ってるんだ？

「ねえ、お姉ちゃん」

「なあに？」

「僕、お姉ちゃんの魔法を教えてほしいな」

まず最初は近くににいる人が使っている魔法でも学んでみるか。記憶がないから魔力の運用方法も分からんし、言葉として覚えているのは『魔法の射手』と『雷の暴風』、『千の雷』だ。漫画を読み込んだからこの3つはラテン語も覚えてる。が、全部が攻撃魔法の上3つの内2つは中級以上の魔法。練習する場所なんざありやしねえ。

現代生活において使えるレベルの魔法から徐々に学びたい。簡単な重力制御魔法や治癒魔法、本や食材を半永久的に保存するための魔法等々。後は体の成長を促すためにも武術を修めたり、対魔・対物障壁の強化をしたり……あれ？俺、寝る時間あんのか？

「良いわ。魔法学校に行くんだつたらネギも魔法を習うんだし、簡

単な魔法だったら私が教えてあげるわ」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「……あら、なぜだか鼻血がでてきたわ。なんでかしら」

あんたがシヨタコンだからだよ！！

「ネギーー！」

ひとりネカネの痴態に呆れていると、ある少女が燃えるような赤い髪を靡かせながら勢いよく扉を開けて入ってきた。ええと、見た目からしてツンデレ少女、もといネギの幼馴染みのアーニヤに違いない。

「もう、心配したんだからね！いつもいつもネギは周りに迷惑ばかりかけるんだから」

入ってくるなり一人でぶつくさ言い始めるアーニヤ。もう最初の部分以外は過去の話のようだから、要所要所だけを聞き取りながら他は全部聞き流す。誰が好き好んで真つ正面からツンデレの相手をせにゃなんののだ。ただでさえ面倒な感じが漂っているシヨタコ……ネカネさんがいるつてのに、……あれ、ネカネさん？

「お、お姉ちゃん？」

「……ウフフ、ネギは可愛いわねえ」

ファット！！……それは脂肪か。

ファツキン！！どこか近くにまともな人は居ないのか？誰か、この際俺の主治医でも良いからこの状況から助け出してくれ！……ん？

「んう？」



「…………ネギ？」

なん、だ？頭が痛くなってきた…ぐぬ、次第に激しい痛みが…いや、こりゃただの頭痛じゃない。記憶の波が、ダムが決壊したかのように流れ込んでくるんだ！俺は今4歳だと言っ記憶が一番に思い出されたが、つまりは脳もそこまで発達しているわけでも無いから、処理能力が追い付かない。

「ぐ、うづうづ……………」

「ちよ、ちよつとネギ、大丈夫なの？」

頭を抱えるように前のめりに倒れた俺の様子に異変を感じたアーニヤが話しかけてきたが…：…そう見えるんだったら眼科に逝きなさい。もしくは誰か大人を、医者を呼んでこい。嗚呼、痛みで言葉を口に出すこともできない。

どんどん大きくなる痛みで今にも気絶してしまいそうだが、まるで思考と身体が分離されているかのように冷静に物事を考えることができる。

「ぎ！ぐうづ……………はあ、はあ……………ふう。もう大丈夫だよ。心配させてごめんね、アーニヤ」

「ふ、フン！ホントよ！あまり心配させないでよね！」

はいはいツンデレツンデレ。

それは兎も角、ようやく痛みが収まってきた。息を整えながらその記憶を一つ一つ整理していこう。

えっと、俺がネギになる直前、家の中で亡くなったと……………なん、だど？死因、心臓発作。それはまだ良い……………何なんだ、死神の手違

いって！ふざけんな！オウ、ザツクレイジーなんて笑い飛ばせる  
と思ってるのか！？

……まあ、納得できないが既に過ぎてしまったことだ。次にいこ  
う。                    としての意識が覚醒するのは悪魔襲撃事件直後で、  
情報の凍結もほぼ同時に。……そうか、さっきの頭痛はこれが原因  
か。

でと、次が最後か。三つ目は……才能の付加？何々、『魔術』『  
体術』『創造』……他にも試してみなければ分からない物も上から  
羅列されて浮かんできたが……あれ？俺のハイス<sup>ネキ</sup>ペックがチートされ  
たぞ？いいのか、主人公がこんなにバランスブレイカーな能力を兼  
ね備えてても。……嗚呼、『俺』と言うイレギュラーがいる時点でこ  
の物語は一つの平行世界とでも言えるか。

ま！取り敢えず長く、太く生きられるよう努力はしてみようかな！

「ウフフ、ネギは可愛いわねえ……」

何だろう、急に不安になってきた。誰かこの人を正しいレールに  
軌道修正してくれないかなあ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8678y/>

---

あれ.....ここはどこですか？

2011年11月26日00時55分発行